

基調報告および
アンサー・シンポジウム
「JAL2016WS「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 III」への応答
—“またもや”感を越えて」
について

水谷長志
東京国立近代美術館

はじめに 3年目を迎えた JAL プロジェクトと公開ワークショップ (WS)

■初年度 JAL2014「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」

「平成 26 年度文化庁文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業)」
事業実施期間: 2014.12.1-12.11 招へい者: 7 名

公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」

JAL2014 最終日 2014.12.11 開催 於, 東京国立近代美術館講堂

■次年度 JAL2015「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」

「平成 27 年度文化庁文化芸術振興費補助金(地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業)」
事業実施期間: 2015.11.16-11.17 招へい者 9 名:

公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 II」

JAL2015 最終日 2015.11.27 開催 於, 東京国立近代美術館講堂

■三年度 JAL2016「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」

「平成 28 年度文化庁文化芸術振興費補助金(地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業)」
事業実施期間: 2016.11.28-12.19 招へい者 9 名:

公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 III」

JAL2016 最終日 2016.12.9 開催 於, 東京国立近代美術館講堂

1. JAL2015 の 5 つの目的:

- 1) JAL プロジェクト招へい者 (JAL*) による日本の美術図書館および関連情報システムの理解を促す。

To further JAL*s' understanding of the art libraries and related information systems in Japan.

* JAL: Japanese-art librarian [abroad]

- 2) 日本の美術図書館員 (JJAL**) による海外の JAL の図書館とその置かれた状況の理解を促す。

To further JJAL**s' understanding of the art libraries that the JAL project invitees are working for, and the situations in which the libraries find themselves.

** JJAL: Japanese Japanese-art librarian

- 3) JJAL と海外の JAL との間の相互理解と交流を促す。

To promote mutual understanding and exchanging between JJALs and JALs abroad.

- 4) 海外の JAL との間の相互理解と交流を促す。

To promote mutual understanding and exchanging among JALs abroad.

- 5) 日本の美術図書館および関連情報システムの現在を海外の JAL の眼から客体化し再考することを試みる。

To try to review and rethink the current state of Japan's art libraries and related information systems from the perspectives of JALs abroad.

2. 今年の JAL は 7-9-9

7 カ国：イタリア、デンマーク、イギリス、フィンランド、USA、オーストラリア、ブルガリア

9 都市：ヴェネツィア、コペンハーゲン、ケンブリッジ、ヘルシンキ、ナポリ、ピッツバーグ、メルボルン、ソフィア、ジェノヴァ

9 名の招へい者：

マルタ・ボスコロ・マルチ	ヴェネツィア国立東洋美術館長
メレッテ・ピーターセン	コペンハーゲン大学図書館員
クリスティン・ウィリアムズ	ケンブリッジ大学図書館員
テロ・サロマー	北海道大学欧州ヘルシンキ事務所副所長
ヴァレンティナ・フォルミサノ	ラファエレ・セレンターノ・アート・ギャラリー・キュレータ
グッド長橋広行	ピッツバーグ大学図書館員
ウェイン・アンドリュー・クロザース	オーストラリア・国立ビクトリア美術館キュレータ
ゲルガナ・ペトコヴァ	ソフィア大学現代日本研究センター所長
アウローラ・カネパーリ	キヨッソーネ日本美術館ボランティア

3. JAL2016 公開ワークショップでの試み

3.1 言語的サポート

JAL プロジェクトの初回の昨年度の招へい者 7 名は日本人の JAL、つまり日本人で海外において日本美術の資料を扱う専門家であったのに対し、今年はグッド長広さんを除く 8 名は日本語を母語としない 7 カ国、8 都市からの参加であり、この 9 名が体験した日本語での研修、日本語での WS3 でのプレゼンテーションの困難と負担は、昨年同様に大きく険しいものだった。

今年度の募集要項においては、より多様な国籍の方を招くことを意図し、日本語での日常の会話は必須の条件としたが、WS3 におけるプレゼンテーションなどにおいては、語学的障壁を緩和するために、昨年同様に日英バイリンガルのプログラムコーディネータ（ジョン・ウッドさん、ロンドン SOAS 図書館司書、JAL2015 招へい者）を設け、さらに通訳翻訳の助力を確保する予算も計上していた。

3.2 提言に向けたプレゼンテーション

初年度の WS においては 7 名の招へい者が自己紹介と「提言」を含んで各人が個々に 20 分間のプレゼンテーションを行ったが、今回は、午前中に 9 名各人が 15 分の自己紹介を、午後には 3 人 3 グループの「提言」のためのプレゼンテーションを行った。これは 2015 年の WS2 と同様のプログラムである。

国籍も母語も異なる招へい者が、11月28日に初めて集い、以後10日余の研修をへて親睦を深めたとは言え、短時間の内に共同作業としてのプレゼンテーションを成し遂げるには大変な熱意と時間と奮闘が必要だった。

その成果と「提言」の内容は、本書の中核となる次頁以降の招へい者による力作の報告をご覧いただきたい。

3 グループの担当と「提言」の題目：

■第1グループ：ボスコロ、ペーターセン、グッド長橋

「日本から海外へ 日本におけるデジタル化の活動をいかにして外国人研究者に伝えるか」

From Japan to abroad: How to present Japan's digitalization projects to international researchers

■第2グループ：サロマー、フォルミサノ、ペトコヴァ

「アートは世界の遺産」

Art belongs to all

■第3グループ：ウィリアムズ、クロザース、カネパーリ

「日本の文化資源を広めるための協力」

Collaboration toward sharing Japanese cultural resources

3.3 アンカ・フォクシェネアヌ教授による特別招待講演

昨年の同様、JALの活動は広く海外における日本研究の文脈において存在することを考慮して、今回はルーマニアのブカレスト大学のフォクシェネアヌ教授に「東欧における日本研究の情報・資料収集の問題－博士課程の事例を中心に」と題する講演をしていただいた。本報告書 p.85-108. をご覧いただきたい。

同教授は日本語科主任であり、同大学日本研究センターの所長として活躍され、毎年同センターの主催による日本研究のための国際シンポジウムを開催しているし、昨年2016年のEAJRSの年次大会は同地で開催され、大きな尽力でもって盛会とさせている。

4. 3年間のJALの総括の試み

4.1 JALはどこに居るのか？ 何者だったのか？

2014年は7名、15年9名、16年9名、総計JALは25名であった。そのうち8名が日本人であり、ほかは12カ国から来日した。その25人のJALの所在地、所属機関、専門職能、専門主題をカウントしたものが下記である。

■JALの所在地	人	■JALの所属機関	人
Europe	8	Museum*	10
USA	7	University*	10
UK & Ireland	4	Research Institute	2
Scandinavian	3	Gallery (Private)	1
Asia(South Korea)	2	independent	1
Australia	1	other	1

*Museum, University の Library を含む

■JAL の専門職能	人	■JAL の専門主題	人
Librarian	13	Japanese art	14
Curator	6	East Asian art	2
Researcher/Professor	5	Japanese literature & art	1
Archivist	1	Asian art	1
		Comparative culture	1
		Contemporary art	1
		Japan studies	1
		Japanese contemporary culture	1
		Japanese independent film	1
		Visual resources	1

4.2 Department of East Asia という括り — CJK の拮抗と J の相対的低下

上の表の所属機関を見れば、Museum と University がともに 10 人を数えている。この 10 人にはそれぞれの図書館員、学芸員、教員を含んでいる、つまり親機関の種別である。このような機関においては、往々にして「東アジア部門」(Department of East Asia) の括りで部局が構成されていることが多く、すなわち CJK : Chinese, Japanese, Korean が同一部局において配置され、やはり往々にして C と J と K は拮抗しながら、その範囲を拡大し、あるいは守ろうとしていることが、多くの美術館、博物館、大学の現場で見取れた。

例えば、招へい者の一人、ペトコヴァ教授のソフィア大学日本語科の教室を圧倒するかのような孔子学院 (Confucius Institute) の看板からは、ここの中国語ならびに中国文化伝道の大きな資金の投下がうかがわれた。同様に韓国国際交流財団 (Koran Foundation) の活動も漏れ聞こえてきた。それに対し、国際交流基金 (Japan Foundation) など日本からの援助の退潮もまたしばしば感触したのである。

4.3 低減化する日本—美術—研究者 出張セミナーの試みから

実行委員の 3 人 (山梨・谷口・水谷) は、2016 年の JAL であるグッド長橋さんと 2015 年のワグナーさんのピッツバーグ大学を 2016 年 10 月に訪問し、日本美術史の専攻博士課程後期に在籍し、博士論文執筆候補 3 名との意見交換した。その詳細は谷口氏の本報告書に掲載されている (p. 138-145)。

この訪問およびヒアリングで直截に語られたことは、特に学部学生は、ネットワーク情報資源のアクセシビリティの高低から CJK の専攻分野を確定する傾向にある、ということだった。博士論文執筆候補者である 3 人は日本語の壁はすでにクリアしたとも言えるのだが、学部生においては、日本のテキスト・画像のオープンアクセス、英文テキストの翻訳改訂が進まない状態によって、J を専攻したくとも、デジタル化に邁進して成果を挙げる CJK の CK に流れているということである。

このことは次に記すアンサー・シンポジウムに登壇していただいた永崎研宣さん (一般財団法人人文情報学研究所人文情報学研究部門主席研究員) の次の発言そのままに繋がっているのである。「今日明日はシカゴ大学で日本研究 DH のワークショップに参加なのですが、今日はまたしても「日本の資料がデジタルだと少ないし使いにくいしどこにあるかわかりにくい」と

いう批判に曝されたところですよ。特に北米にくるとその話をされることが多く、結果的に日本文化研究者を減らすことにつながっているだろうと思うので、なんとかしなければと切に思っています。」

<https://www.facebook.com/nagasaki.kiyonori?fref=ufi&pnref=story>

2016.11.12 11:26

5. 「JAL2016WS「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 III」への応答—“またもや”感を越えて」

JAL2016の9人は3つのプレゼンテーションにおいて「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」を行い、その真率かつ的確な提言にWSの参加者に多くの感銘とも言える印象を残した。同時に参加者からはJALプロジェクトはこの提言を受けるだけで良いのか、それを記録することで収束して終わるのか？という指摘が、重ねられた。

確かに永崎さんの「結果的に日本文化研究者を減らすことにつながっているだろうと思うので、なんとかしなければと切に思っています」という感慨は、WSの参加者と実行委員の多くの共感であったが故に、当日のコメンテータを務められた国際日本文化研究センターの江上さんの発案により、急遽、標記のアンサー・シンポジウムが企画されて、翌年の2017年2月3日にWSと同じ東京国立近代美術館講堂で開催された。

その全容は本報告書に音源より書き起こされているので、是非、ご覧いただきたい。

このシンポジウムにおいて、確認されたことはJALが残していった提言は、必ずしもJALの文脈にとどまるものではなく、広く日本における文化資源全般の情報発信と海外の日本研究との交流、支援に関わる課題であるということである。そして、「JALの提言に対する今後の日本側の課題解決のための指針を作成し、残し、広く関係諸機関のみなさんに伝え、問いかけることが肝要である」というシンポジウムに登壇していただいた安江明夫元国立国会図書館副館長からの重ねての要望を踏まえて作成したのが、「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための課題解決についての提案」(本報告書所収 p.211-212)である。

これをもってJAL2014-2016の活動を一区切りつける、一応の総括と考えている。

6. 終わりに

JALの25人を日本に迎える前に実行委員は、多くは筆者であったが、そのJALが居る国、都市、そして働く現場を事前に把握するために同地をすべて訪問した。また、ほかの招へい候補者を探して、実際の参加はなかったが、ポーランドやオーストリア、スウェーデンなどにも足を延ばし、多くの美術館、博物館、図書館、文書館を訪問した。

生物多様性(Bio-diversity)という言葉があるが、この美術館、博物館、図書館、文書館というMLAもまた、一つとして同じinstitutionは無く、まさにMLAは多様である。JALの3年間は、MLA多様性(MLA-diversity)を感じ続けた3年間であった。

この多様性を保ちつつ、GLOBALでUNIVERSALな連携が可能かを問い、討議したのがJALの3回のWSであったと今更ながらに思っている。そこに集って下さったJALと関係者のみなさま、WS、さらにはアンサー・シンポジウムにご参加いただいた全ての方々にあらためて感謝の意を表する次第である。